

## 書 評

リチャード・E・シトウィック 著  
山下 篤子 訳

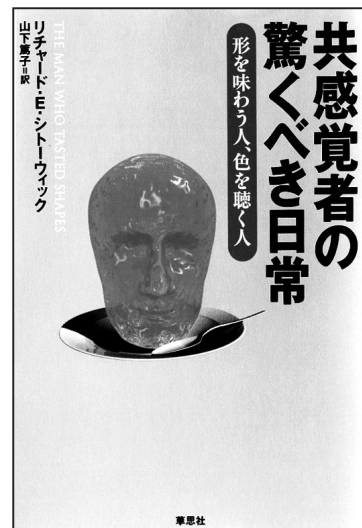
# 共感覚者の驚くべき日常

草思社

ISBN4-7942-1127-9

2002年発行

評者：筑波大学 望月 聡



共感覚とは、ある刺激に対して別の領域の感覚が生じる、ちょっと不思議な、まれな現象を指す。音に色を感じたり（色聴）、文字や数字に特定の色や音を感じたりする現象が知られている。著者であり、神経科医であるシトウィックは、10万人に1人と推定されている共感覚者の1人である芸術家マイケル・ワトソンの、何気なく口からすべった一言“チキンのとがりが足りない”に医学的興味を持ち、この不思議な現象についての研究を始めた。本書は、著者自身と、マイケルを中心とする共感覚者とが紡ぎ出した研究の成果やそこに至るプロセスを述懐している、いわば「出会いと対話による」科学の記録である。

本書は、共感覚探究の記録と考察である「ある医学ミステリー」第一部と、「情動の重要性についてのエッセイ」とされる第二部からなる。一見するとこの両者のつながりはわかりにくい、その答えは共感覚についての謎解きにある。

第一部は、新しく隣人になった家の主であるマイケルの家でのエピソードから語られ始め、指導者であるウッド博士との探偵のような対話、思わぬところで出会った、ポケットベルのけたたましい音に反応するもう一人の共感覚者ヴィクトリア、マイケルとのちょっとした実験、学会での発表の様子、その後の反響などが順を追って語られている。こういった記述の合間には、著者自身の生い立ちや、医学教育に対する不満とそれを覆すような発見、同僚の研修医の「奇妙な現象」に対する無関心や、検査に溺れる医学に対する批判などが縫うように語られている。その後、薬剤による共感覚体験の変動や、マイケルの脳血流測定によって得られた驚くべき結果などが

ら、共感覚現象そのもののメカニズムに対する、ある一つの「答え」が浮かび上がってくる。そして、“共感覚は、実際は私たちが誰でも持っている正常な脳機能なのだが、その働きが意識にのぼる人が一握りしかいないのだ、と私は考えている”と結論づけている。

2002年には、共感覚者の脳を、fMRIを用いてイメージングした結果が論文として報告されている。話された言葉に対して色が見える共感覚者は、非共感覚者では見られない、左半球の色彩中枢の活動が見られたという。この結果は、本書の著者であるシトウィックの見解と一致する点と、異なる点を含んでいる（どこが一致するかしないかは、本書を読んで、考えてみてください）。

第二部は、“あなたが意識のある心として知っているものは、何が実在で真実かを定める決裁者ではないというテーマを発展させた”との覚え書きの下に書かれた、情動や意識といった、認知神経科学で今流行のことがらについての考察が、まさに「エッセイ」として書かれている。

本書は、ラマチャンドランの『脳の中の幽霊』（本書の訳者である山下篤子氏による翻訳）や、ダマシオの『生存する脳』と同じように、脳と心、あるいは意識に関する一般向けの科学読み物の一つではあるが、興味深い、不思議なことについて詳しく解説してくれる読み物としてよりは、むしろ、こういった「不思議な現象」がいかに偶然に発見され、それをいかに研究するのか、という、方法のところを世に紹介するという点で異彩を放っているということが出来るかもしれない。「ミステリーを解きほぐす」ためには、このような一見して地味な、地道な報告の積み重ねがあるのだということを教えてくれる。